

二孝女都由・登岐之碑解説

木 許 博

(会員 佐伯市木立沖)

(一)所在地

野津町川登小学校正門脇(国道一〇号線沿い
風連鍾乳洞停留所の北一、〇〇〇m)、縦二
二五メートル横一〇五センチ

◆題 字

旧白杵藩主(第十五代)稲葉久通公、白杵稲葉
藩主(岡野氏の五男)天保一四一明治二六、在
任。文久二一明治四、廟所江戸東禪寺

◆碑文撰

菊地純、和歌山藩儒、幕府儒官、詩文をよく
した。後年京都で教えた。明治二十四年没七
十歳、「二孝女碑撰は没四年前で、署名に「平
安」とあるは京都のこと」《平成七年夏判明》

◆碑文書

巖谷修、近江水口の藩士、医師(父も)錦鶏間
祇候(京都御所の居間に奉仕する者の宮中資
格)となる。小波は三男で明治十八年、尾崎
紅葉らと硯友社を起こしのち童話文学につく
した人。玖珠の久留島武彦はその門下生、修

は号は一六、日下部鳴鶴と並ぶ明治の大書家、

明治三十七年没七十歳、《平成七年一月判明》

このように題字も地元の殿様が書き、碑文の撰書とと
もに超一流の人の手になったのは特筆すべき記念と言え
よう。

(二) 建立設置の経過

明治二十年六月、野津町明治橋附近に建立、昭和十五
年(皇紀二千六百年)川登小学校内に移す。(二孝女の
生地にあるべきとの町民意志による)

(三) 鏤絵の壁画設置

平成七年川登小学校改築を機に、二孝女をテーマにし
た鏤絵が完成。

平成七年十二月十七日「大分合同新聞」に紹介され
た。国道からまっすぐ約五〇mの体育館正面の壁に、
縦二・五m横七m、側に町教育委員会による内容説明
文が石刻されている。

「二孝女」は史実

これは史実であり、いわゆる「言い伝え」「お話し」
ではない。

集に当たった汐月三代吉氏の苦勞は大きかった。

本文中

中国古典の援用(詩経・旧唐書等)など、池田勘氏の御助言を戴いた。

末尾に掲げる「臼杵史談」に紹介された孝女を賞する作品は、すべて実作にふれての記録で、水戸、臼杵その他の地域の各界の人たちによって寄せられている。(筆者の知り得ている資料も相当な量であるが、あえて割愛したい)

いま挙げた「臼杵史談」の第十一号(昭和九年八創刊同六年V)から第十四号にわたる、小野西溪氏の「二孝女」の長文記事は、細密な考証と調査資料による研究として、高く評価されている。

「解説」のことについて

野津町教育委員会の関係の方から提案を頂いた原文は、難解、疑問点が多く実際の碑文と突き合わせて見たところ、数多くの文字に違いのあることが分かった。一般に碑文、金石文は刻印、転写、印刷の過程で、原文との「距離」がかなり出てくるようであるから、読む場合は慎重を要するようである。それに、異体字が多用されるのでその面の配慮が必要となる。

「二孝女」碑文は凡そ八〇〇字で、異体字がかなり使われていて「原文に忠実に」との方針をとったため、編

碑文の撰者、書者がどの誰であるか判かったのは、不勉強で恥かしながら四年数ヶ月を過ぎた時点であった。そこでやっと文章の深さ、高さの所以も解けた感じであった。ちなみに平成三年に手掛けた「虹澗橋」解説の場合、それが判かったのは十ヶ月経った頃であった。

「二孝女」はその史実であることの価値もさることながら、歴史としての重さ社会性、教育的道德性など語り継ぐべき「郷土の宝」といえるようか。

今回の川登小学校改築にともなう「二孝女」の顕彰は、野津町教育委員長内藤克己氏(「二孝女碑文」解説の提案者)を軸とする関係諸機関団体及び各氏のお骨折り、とり分け芦刈町長の全面援助(鰻絵の発想は仄聞^{そくわん}するところ、町長のアイデアとのこと)など、歴史を彩る盛事として永く町史を飾るであろう。

「歴史興し」は「人興し」となり、「町興し」につながることを私は確信する。

孝女 都由之碑

大野郡二孝女碑豐後國大
野泊郡有二孝女物星移易
其孝義殆將就湮滅大分集
尾如藤章卿子曰杵春藤倚
松野津赤嶺子玉及其同志
者胥議欲建碑以之具狀來
謁余文乃據狀叙之曰二孝
女長曰都由次曰登岐河野
氏父曰初右衛門家世業農
都由幼而喪母年甫十四適

于內平郡民苗藤直八能理
其家事初右衛門酷信浮屠
以文化紀元春東行歷觀僧
親鸞旧跡逮冬西歸道罹萬
疾寓于常州青蓮寺過期弗
還音問隔絕不獲其踪緒二
女憂冲無措翌年冬父之書
信自常州至二女喜悲交集
欲往看護之親戚故旧因止
乃回逃出又不果直八家素
貧出傭作于臼杵八年六月
都由赴臼杵謂直八曰妾欲

省父千里遠途再會難期況
舅老姑病定省有闕非計之
宜也願良人更娶以奉養二
親又就郡宰懇請郡宰憫其
志令里正諭直八許之二女
大悅結束將祭鄉人或謂登
歧曰老爺割慈思弃卿等何
不忍老爺之甚乎且女子遠
行懼有虞之禍女兄年已笄
字或可無慮卿姑族之登歧
流涕曰妹之於姊均是同胞
何問長之与幼耶不幸遭奇

禍有以耳於是二女斷髮毀
容以上途其年十月遂至常
州父子相見抱指悲泣共叙
其無恙見者惻然為動客遠
近喧任誦其孝義事聞水戶
侯召見賜以衣物余曰梓侯
在江戶邸以其泊邇保侯之
治下乃令吏邀之侯与夫人
並召見賜物明年二月令吏
卒護送其國給以田若干畝
永免租賦都由復歸夫家能
事舅姑紡績耕稼丹少懈隣

里鄉黨識子不識妻不嗟稱
都由以天保八年七月二十
六日歿享年四十八登及文
化十四年六月十八日先父
歿年二十五夫二女如荒陬
之女兒已而其所習非紡績
織紵則蚕葉耕稼而孝義之
感孚為公侯所寵礼其資之
美使之然也豈可謂偶然乎
哉直八亦有義僕名先是直
八為白杆士人山口某家奴
会主人夫妻罹疾殍直八鞠

育其遺孤弗懈怠其離鄉里
久而不歸者為此也烏乎有
斯夫而後有斯妻有斯婦而
後有斯妹要之咸不置錫類
之所致宜矣水戶白杆二侯
為之前加藤春藤赤嶺之三
氏為之後以稱揭其美胡忠
其孝之義之不彰且任乎銘
曰
孝年惟孝維妹与姊白雲親
舍出厥梓里夫義妻順滿門
桃李棣華群群和樂且喜俾

孝世閱墙不相容之徒聞婦
妹之風安得弗慚汗而愧以
予哉

明治二十年六月 平安南池純撰
内閣書記官正五位勲四等 巖谷倚書

平福六年三月
佐伯市本立
本所 持字



書下し文

大野郡二孝女碑

豊後の国大野郡泊邦に二孝女有り。物星移り易り其の孝義殆んど、將に湮滅に就かんとす。大分県属加藤章卿、臼杵の春藤倚松、野津の赤嶺子玉、及び其の同志の者と胥議り碑を建て以て之を表はさんと欲し、状を具して来りて余に文を謁ふ。余乃ち状に据り之を叙して曰ふ。

二孝女、長を都由と曰ひ次を登岐と曰ふ。河野氏にして父を初右衛門と曰ひ、家世農を業とす。都由幼にして母を喪ひ年甫めて十四、内平邨の民首藤直八に適ぎ、能く其の家事を理む。初右衛門酷く浮屠を信じ、以て文化紀元春東行して僧親鸞の旧跡を歴観す。冬に逮び西帰せんとして道に篤疾に罹り常州青蓮寺に寓す。期を邁ぐるも還らず音問隔絶し、其の踪緒を獲ず。二女憂冲措く無し。翌年冬父の書信常州より至る。二女喜悲交集まり、往きて之を看護せんと欲す。親戚故旧固く止む。乃ち逃出を図るも又果さず。直八家慕て貧にして傭作に臼杵に出づ。八年六月都由臼杵に赴き直八に謂ひて曰く「妾父を千里の遠途に省みんと欲す。再会期し難し。

況んや舅老い姑病むに定省闕くる有るは計の宜しき非ざるなり。願はくは良人更に娶りて以て二親の養ひ奉れ」と。又郡宰に就いて懇請す。郡宰其の志を憫み、里正をして直八を諭さしめて之を許す。二女大いに悦び、結束して將に、郷を發たんとす。人或ひは登岐に謂ひて曰く「老爺慈忍を割きて卿等を弃つ。卿等何ぞ老爺の甚だしきを忍らざらん。且つ女子の遠行は虞らざるの禍有るを懼る。女兄は年已に笄字或ひは慮れ無かるべし。卿は姑之を族つ」と。登岐涕を流して曰く「妹の姉に於けるや、均しく是れ同胞なり。何ぞ之に長ずると幼なるとを問はんや。不幸にして奇禍に遭はば即ち外有るのみ」と。是に於て二女断髪し容を毀ちて以て途に上る。其の年十月遂に常州に至る。父子相見て抱持して悲泣し共に其の無恙を叙す。見る者惻然として動容を為し、遠近喧しく其の孝義を伝誦す。事水戸侯に聞こえ侯召見して賜ふに衣物を以てす。会、臼杵侯の江戸邸に在り、其の泊邸の侯の治下に係るを以て乃ち吏をして之を邀へしめ、侯と夫人と並び召見して物を賜ふ。明年二月吏卒をして其の国に護送せしめ、給ふに田若干畝を以てし、永く租賦を免ず。都由復た夫家に帰り、能く舅姑に

事へ、紡績耕稼少しも懈らず、隣里郷党識ると識らざると嗟称せざる莫し。都由天保八年七月二十六日を以て歿す。享年四十八。登岐文化十四年六月十八日父に先んじて歿す。年二十五。夫れ二女は荒陬の女兒の如きのみ。而して其の習ふ所は紡績織紉に非ざれば則ち蚕葉耕稼のみ。而るに孝義の感孚、公侯の寵礼する所と為りしは其の資の美之をして然らしむるなり。豈偶然と謂ふべけんや。直八亦義僕の名有り。是に先んじて直八臼杵士人山口某家の奴と爲る。会、主人夫妻疾に罹りて歿す。直八其の遺孤を鞠育して少しも懈怠せず。其の郷里を離ること久しくして帰らざるは此れが爲なり。烏乎斯の夫有りて而る後に斯の妻あり。斯の姉有りて後に斯の妹有り。之を要するに咸置きざる錫類の致す所宜なり。水戸臼杵二侯之が爲前に、加藤、春藤、赤嶺の三氏之が爲後に、以て其の美を称揚す。胡ぞ其の孝の義の彰はれ且つ伝はらざるを患へんや。

銘に曰く、

孝なる乎惟だ孝

維れ妹と姉と

白雲親舍

蘇の梓里を出づ

夫は義にして妻は順

門に満つ桃李

棧華^{いかい}驛^いとして

和して楽しみ且つ喜ぶ

世を挙げて^{かき}壇^{せめ}に閱^みぎて相容^{あひま}れざるの徒をして姉妹の風を聞かしめば、安んぞ^{いづく}慚汗^{ざんかん}して愧^はれざるを得んや。

明治二十年六月

内閣書記官正五位勲四等

平安

菊池

純

撰^{せん}る

巖谷

修

書^かく

【語註】

邨^{むら}（むら）|| せん、邸、村

物星移易^{ぶつせい}（ぶつせい）|| うつりかわり

物換星移 || 事物が変化して年月が推移する、世の中が

移り変る

湮滅^{いんめつ}（いんめつ）|| 滅んで消え去る

属^{ぞく}（ぞく）|| 下級の文官

胥^{あひ}（あひ）|| ともに、みな

謁^こ（こ）ふ || 求める

据^よ（よ）り || たより、よりどころ

甫^は（は）じめて || やつと

適^{とつ}（とつ）ぐ || ゆく、嫁にゆく

浮屠^{ふと}（ふと） || 仏

逮^お（お）よぶ || 至る

邁^す（す）ぐる || ゆく、すぎる

踪緒^{そうちよ}（そうちよ） || 踪 ↓ あしあと

足どりのわかるいとぐち

憂冲^{ゆううちゆう}（ゆううちゆう） || うれい、むなしさ

纂^{きは}（きは）めて || きわめて、はなはだ、極

備作^{ようさく}（ようさく） || やとわれて働く

定省^{ていせい}（ていせい） || 定省温清

親孝行

晩には寢具を整え（定）

朝は安否をうかがい（省）

冬は温かく（温）

夏は涼しくしてやる（清）

闕 ↓ 闕^か（か）く || 欠ける

就^つ（つ）く || おもむく、近づく

結束^{けつそく}（けつそく） || 旅の支度

慈忍^{じにん}（じにん） || 慈悲忍辱、思いやりとがまん

卿等^{けいら}（けいら） || 相手を呼ぶよびかた

弃^す（す）つ || 棄の古字

何不忍老爺之甚（なんぞろうやのはなはだしきをいから

ざらんや)

忍↓いかる、「忍」では意不通 碑は「忍」とあるがお
そらく誤刻ならん?

虞はかる||虞(ぐ)、はかる、おそれ、おもんばかり
禍(わざわい)||禍

女兄||姉

絆字(けいじ)||婚約した女性がかんざしをさしあざな

(字)をつけること

竝(ま)つ||待つ

惻然(そくぜん)||あわれみ、いたむさま

動容(どうよう)||いずまいをただす、容儀を正す

侯(こう)||侯の本字

竝(なら)ぶ||並の本字

畝(は)||畝の俗字、面積の単位 約1アール

嗟称(さしょう)||感心してほめる

歿(ぼつ)す||歿の本字

荒陬(こうすう)||遠い果ての辺鄙な土地

織紵(しよくじん)||はたおり

蚕葉(さんよう)||桑を植え蚕を飼う

耕稼(こうか)||耕して作物を作る

感孚(かんぷ)||真心が通じ合う。孚↓誠信

寵札(ちようれい)||寵↓いつくしむ、めぐむ

義僕(ぎぼく)||忠義な召使

鞠育(きくいく)||鞠↓やしなう

不置(つきず)||置は竭 無くならない

錫類(せきるい)||善い仲間をたまふ、子孫に善良な者が

あるようにしてやる、類は善

胡……不||なんぞ……ざる、どうして……ないだろうか

白雲親舍||白雲孤飛、旅先で親を思うたとえ

厥(そ)の||其の

梓里(しり)||ふるさと、梓は建材、きささげ、父母が子

孫の為にあずさの木を植えておいた村里の

意。

棣(てい)||いくり、にわうめ、山桜桃、

棣鄂之情||兄弟の美しい愛情、棣の花の美しく愛らしい

ことをたとえる

棣萼||兄弟をいう、にわうめは萼が相倚って美しい花

を形成することを兄弟相恃(たの)むにたとえる

鞞鞞(いい)||花の盛んなさま

和楽(わしてたのしむ)||仲よく和らぎ楽しむ

喜(よろこぶ) 喜に同じ

俾(し)む 使に同じ、使役(せる、させる)

闕牆(かきにせめぐ) 闕↓牆の俗字。牆↓牆の俗字。同

じ垣根の内ですう、兄弟どうしの
うちわもめ

慚汗(ざんかん) 甚だしく恥じて汗の出ること、ひやあ
せ

愧死(きし) 死はぢて死ぬ、世間に顔向けが出来

ぬほどにはじる、慚死

修 修(おさむ) (しゅう)

口 訳

大野郡二孝女の碑

豊後の国大野郡泊村(とまら)に二人の孝女がいた。世の中が
移り変つて、その孝行の意義がほとんど忘れられて消え
てなくなろうとしている。ここに大分県の役人である加
藤章氏が白杵の春藤倚松(しろう)、野津の赤嶺子玉氏(しぎよく)、および
その同志の者たちとでお互いに相談をして、孝女の碑を
建て、世に表わそうと考え、書状を持つてやつてきて私
に碑文を依頼した。私はそこで書状をよりどころとして

次のように書いた次第である。

二人の孝女は、年上を都由、年下を登岐と言つて姓は
河野、父は初右衛門(はつえもん)と言ひ、家は代々農業であつた。都
由は幼いころ母をうしないやつと十四歳で内平(うちへい)の住民で
ある首藤直八に嫁ぎ、家事をうまく取りしきつていた。

ところで初右衛門は強く仏を信仰し、文化元年の春関東
に旅立つて僧親鸞(しんらん)の旧跡を巡拝してあるき、冬になつ
て西に帰る途中ひどい病氣にかかり、常州(じょうしゅう)の青蓮寺に
かりずまいすることになった。

期限がすぎても帰つてこず、音信不通で本人のあしど
りのいとぐちさえわからなかつた。二人のむすめは悲し
さむなしさにじつとおれない思ひでいた。ところが
明くる年の冬、父の手紙が常州から届いたのである。ふ
たりは、嬉しいやら悲しいやらで胸がいっぱいで、父の
看護に行きたいと望んだのだが、親戚(しんせき)や知り合いの者が
かたく止めた。それで二人は無断で逃げて行こうとは
かつたが、果たさなかつた。

ところで直八は、家がひどく貧しく、白杵にやとわれ
仕事に出ていた。八年六月に都由は白杵に出向いて直八
に言うのに、「わたしは父をはるか遠い国にたずねよう

と思うが、再びあなたに会うことはとてもむずかしいでしょう。まして舅は年老いて、姑は病氣であるのに、孝行がかなわないのは、私の計画が無理だからでしょう。どうかあなたはもういちど妻を迎えて両親を養つてあげてください」と。そしてさらに郡の長官の所におもむいて熱心に頼んだ。長官はその志を不憚に思い里正にいいつけて直八を諭し、都由の願いを許した。

ふたりは大そう喜んで旅支度をして今や出発しようとしていると、ある人が登岐に言った「あなたたちの父は思いやりと我慢の心を断ちきつて、あなたたちを棄てたのだ。あなたたちはどうして父のそんなひどいうちを怒らないのか。なおまた女子の長旅は思いがけないわざわいが起こるのが心配だ。姉さんはもう一人前のひとだからそれほど心配はいるまいが、あなたは姑があてにしているのでふみとどまっては……」と。登岐は涙ながらに言うのに、「妹でも姉でもひとつ同胞で、なんでもこちらが年上でどちらが年下だなど問題にすることがあるうか。もし不幸にも思いがけない災難に遭つたら、そのときは死ぬだけです」と。

そこでふたりは髪を断ち切り容貌をやつして出発し

た。その年十月にいに常州に着き、親子対面で抱き合つて泣き悲しんでお互い無事であつたことを語り合つた。見ていた者はあわれみいたんで、思わずいずまいを正したという。そして遠くの者、近くの人までその孝行のことは広く言い伝えられたのであつた。このことが水戸侯の耳に入り、侯は二人を召して衣物を与えた。そしてまたま曰杵侯が江戸屋敷に詰めていたが、泊村が侯の治下に関係があるとの縁で、役人を使つて迎えにやり侯と夫人兩人で召見して褒美を与えた。明けて二月家来を使つて川登まで護送させ、いくらかの広さの田を与え、永く租税や夫役を免除したのである。

さて都由は再び夫の家に復帰し舅姑によくつかえ、糸つむぎや畑仕事をすこしもおこたることなく、隣り近所遠方の者までも、知る人も知らない者も、その美談に感心して褒めないものはなかったのである。都由は天保八年七月二十六日に死んだ。四十八歳であつた。登岐は文化十四年六月十八日、父に先だつて死んだ。二十五歳であつた。いったいこの二人は辺鄙な土地のただの女の子にすぎなかつた。しかも手に覚えたのは、糸を紡ぎ機を織る仕事のほかは、蚕の桑を取り、耕して作物をつく

るくらいのものであった。しかしながら親孝行のまごころが通じあつて、身分高い殿様から可愛がられ、手厚く迎えられることになったのは、二人の人の美しさ良さがそうさせたのであつて、どうして偶然の結果などと言えようか。そうなるべくしてなつたのである。

直八はまた忠義な召使としての評判があつた。この話より以前のこと、直八は臼杵の士族山口某家の召使となつていた。たまたま主人夫妻が病にかかつて死んでしまった。直八はあとに残つた子供を養育することにすこしもおこたひがなかつた。本人が郷里をはなれて長く家に帰らなかつたことがあつたが、実はこのためであつた。ああ、この夫があつてこそこの妻がある。この姉があつてこの妹があるのだ。つまるところすべて、いわゆる善い仲間をたまうということによるのであつて、もつともなことであらう。水戸臼杵の両侯が、一人のために先に、続いて加藤、春藤、赤嶺の三氏がその後、孝の美德を褒めあげたのである。どうして二孝女の孝行の意義が世に知られず、後世に伝わらないなどと心配することがあらうか。

孝なるかな孝なるかな この妹とこの姉と

旅の空に親を思う ふるさとを出でてなつかし

夫は義あつく妻は従順 桃や李は門にいつはい

にわうめもかがやき咲いて 仲よく和らぎ楽しみ喜ぶ世の中がこぞつてきようだい不仲であらそ、いまの時代に、此の姉妹の様子を連中に聞かせたならば、どうしてひどく恥じて汗を流し、あまりの恥かしさに死ぬほどの思いがしないだろうか。

「川登村二孝女伝」小野西溪（臼杵史談）一一号

二女が水戸滞在中は勿論其後大方の諸名士より其孝心を賞し賜られたる詩文和歌俳句等積て山の如し今左に二三首を抄録せん

豊州二孝女扶父歸郷余聞之嘉歎爲賦一律

水藩（水戸藩） 石川 清秋 稿

姉妹相携出故閭、思親方寸向誰憐、先翦霧髻雲鬟好、故着廢蓑破笠疎、二六時中念不罷、三千里外意初舒、人生積善無如孝、扶父歸家慶有餘、

送豊後孝女奉親歸故鄉

水府（水戸市） 中田 就

豊州兩歸指東方、萬里尋親逆旅長、疲去夢寒孤枕雨、瘦

來衣冷五更霜、共談往事隱淚泣、亦扶歸程採手行、正羨
姉妹時與露、孝名追歲博桑芳、

比梅篇

白陽(白杵市) 鶴峯 戊申

清寒徹骨玉容眞、何似百花競媚春、姑射神仙身体屑、豊
山二女髮膚新、一時風力江都過、千里飛香水府臻、辛苦
豊論冰雪事、推君天下孝心人、

稱孝作

東肥 釋 慶若

秋葉山頭夏色微、陪親二女故鄉歸、遙知翰墨豊州溢、

令德悠然滿帝畿、 白陽 太田 徳重

身はふたつ心はひとつ思ひにてなせし誠ぞ人の子の道

水府醫師 森 庸軒

春雨のふりにしよにも稀ならん親に仕へてかゝるためし
は 狹山侯臣 池田 安平

乙女子が磨くひかりは玉ほこのみちあきらけきかがみな
りけり 白陽 若林 國興

はる／＼とおもひたちぬる旅ごろも恵の露のときやきぬ
らむ

露霜に染めしにしきをはる／＼とかすめる時に歸る故郷

白陽 大脇 重明

世の中のひとの鏡となるまでにくにのをしへをまもるは

らから 肥後藩士 長岡 齋是知

とし月のこゝろ盡しも親と子のめぐりあふよは神ぞみち

びく 水戸 岩井 直右衛門

天が下高し豊後の梅香る

水戸 枝川 彌右衛門

名にめづる國の色香も豊後梅

白陽 一 貞

吾妻にも匂ふ筑紫の梅の花

白陽 露 重

いさぎよし花の都を歸る鷹

(了)

おわりに

◎「白雲親舎」、野津郷、川登村の里も若葉の萌える季
節とはなった。二孝女にあやかつて、こいねがわくば
平成の孝子たち 数多く出でよかし。

平成八年五月一日

碑文には異体字が多く、印刷は活字の組み立てに時間
を要するため、筆者の毛筆を縮小して掲載しました。

編集部